八木ガバナー語録

これは八木先生がガバナーの任期中、毎月

「ガバナー月信」へ連載されたものです。

— ガバナー就任にあたって —

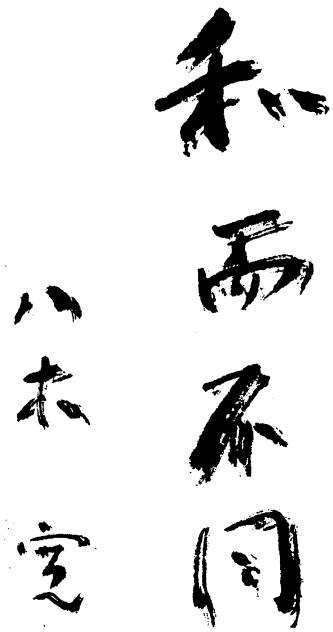
和シテ同ゼズ

ガバナー　八　木　　寛

昨年度は、ロータリー創立75周年のお祝いに明け暮れた感がありました。個人の誕生日とは、人がこの世に生まれひたぶるに生きてきて、生まれた日という一つのふし目にめぐりきて、過去をふりかえりいま在るわが身をみつめる日、と私は理解します。ほかの日には気づかぬ自己の存在に思いをはせる日であり、そこから、こんにち在る幸せをよろこび、親しい人の幸せを祝う情が湧くのは自然の理でありましょう。ロータリー創立記念の祝賀も同じ性質のものと私は考えます。

十年余り前のＲＩ会長コンウェイ氏が"Review and Renew"というターゲットを掲げたことがありました。昨年度の75周年記念の年には、国際ロータリーは75年の長さを誇ると共に、「再検討し更新すべき年」であったと思います。特に日本ロータリーについてその感が深いと私は思います。世界153ケ国85万人のロータリアンの約１割を占める日本のロータリー人口、又ＲＩ財団の寄付額など、日本ロータリーの躍進ぶりは目をみはるものがありました。躍進は前進に急で、足下をかえりみない場合があり勝ちですが、日本ロータリーにその憾みがなかったかどうか。75周年の記念塔は、次の100周年への跳躍台であり、それは次の飛躍にそなえる態勢調整の場であります。

いうまでもなく、ロータリーはアメリカに端を発して、153ケ国にまたがる１万８千に余るクラブから成る国際連合体であります。言語、習慣をはじめ文化歴史を異にする各国のクラブが、固有の独自性を発揮して同じ理



想に向って奉仕活動を実践しているのであります。柳はみどり、花はくれないであってこそ自然の和があり、自然の美があると思います。私は孔子の「君子ハ和シテ同ゼズ」の言葉を想起します。ロータリーは正に「和シテ同ゼズ」の、孔子のいわゆる「君子」であるということができましょう。

次の100周年への跳躍台に立って、態勢をととのえようとする今、日本ロータリーの躍進の内容が「君子」であったかどうか、レビュウする必要があるのではないでしょうか。「同(ドウ)シテ和セズ」の小人の歩みを躍進していなかったかどうか、謙虚に見直すときではないでしょうか。

オーケストラは、多くの種類の楽器の奏者がそれぞれの音色を発揮して和するところにその美があります。コンダクターは、多くの異なる音色の和をはかるためにタクトを振るのであり、各奏者はあくまでそれぞれの独自性を発揮しつゝタクトに従って「和ス」るのであります。

国際ロータリー会長のターゲットも、オーケストラのコンダクターが振るタクトであろうと私は思います。ＲＩ会長は、各クラブの活動を推進するための助言や提案をするのであり、各クラブはそれを主体的に受けとるべきであります。即ち「和ス」べきであって、「同ズ」べきでありません。ところが、律義であると共に直情的短絡的な傾向の強いわれわれ日本人は、ＲＩからの助言や提案をそのまゝ「同ジ」て、眷眷服膺し勝ちであります。その例は、われわれのクラブ生活の中で容易に見出すことができます。

空にきらめく星を手に入れたいと、長い棹を持って背のびをすることは止めて、今年度は、足もとのきれいな小石を一つづつ拾うことにしてはどうでしょう。

この年の地区大会は、第269地区と合同で鳥取で行なわれた。

RI会長のテーマ

第271地区ガバナー

八　木　　寛

ロータリーの綱領は、少し長すぎておぼえにくいので、私は次のように綜合してみました。「ロータリーの綱領は、世界到る処の人間に、理解と善意、而して平和的な関係を発展させ鼓吹しようとするところにある。而してこれは奉仕を通して可能である」

RI会長の掲げたテーマ、「時間を捧げよう　奉仕のために」は、もっとも具体的に、この綱領の根幹を指摘しているようです。われわれロータリアン、奉仕を看板にかゝげてはいても、多忙の故に、あるいはその名のもとに、その実践を延ばし、さらには避けて通ることはなかったであろうか。会長は、ボカラトンの国際協議会でこのテーマを発表し所信を述べた後に、このようにいっています。「以上は私のロータリー実践法であります。それは別に理論奥いものでも、複雑な方法でもありません。全く単純なものであり、基本への復帰に過ぎません。貴方も私も、即ち個人が、自分のクラブで、自分の地域で、自分の職業で、そしてこの世界で超我の奉仕を実践することであります」と。

会長クラリッヒさんが行動の人であることは、ソ連軍との戦闘に、祖国フィンランド軍に義勇兵として戦い重傷を負った、という経歴からもうかがわれます。しかし、同時に思索の人でもあるといわれていますが、そのことは、彼のテーマの解説の中にも片鱗が見られました。超我の奉仕は決して空虚な標語ではありません、と述べて言葉をついで、「奉仕のために時間を捧げることは、われわれにできる最高の時間の使い方であります。奉仕に捧げる時間は、われわれ自身にも、その奉仕を受ける人々にも、無益ではないのです」と説いています。ロータリーの標語 "Service above self. He profits most who serves best" でしめくゝったところ、さすがだと感じました。

ロータリーの創立当初の綱領は、親睦と相互扶助であったと聞きます。その後、クラブ会員の利益を守るだけの利己主義に過ぎないとの批判から、世のため人のためという利他の思想が綱領に加えられました。 "Service not self" が標語となったのはその頃でしょう。当初の思想とつけ加えられた思想は相対するもので、直ちに調和はしなかったようです。利己を背景とした親睦派と、利他を旗印とする奉仕派の論争は想像以上に激しく、シカゴクラブは相当長期にわたってギスギスとした空気がたゞよったと伝えられています。利己と利他の調和を何に求めるかの悩みのはて、いわば激しい陣痛の揚句生れ出たのが、 "not self" でなくて "above self" でありました。

人は唯一人生きるものでない。多くの人や物によってさゝえられ生かされて生きている

のである。とすれば、我をさゝえ生かしてくれる他を生かすことが、我を生かす方法であるとの結論が生れてきます。利己と利他を調和させる接点がこゝに見出されます。自分のためとか、他人のためとかの別のない奉仕。これが超我の奉仕 "Service above self" であります。「最もよく奉仕するもの最も多く報われる」の標語が、すんなりのみ込めるのは超我 "above self" という接点に立ってのみ可能でしょう。ロータリーの哲学がこゝに凝縮されているといってもよいでしょう。

親睦か奉仕かの論争は、往年のシカゴクラブに限らず、こんにちの各クラブにも残っている課題ではないでしょうか。理論的には、"Service above self" で解決されたとしても、現実には、ロータリアンが常に挑戦せねばならぬ課題ではないでしょうか。クラリッヒ会長が自明の概念として使われた超我の奉仕に就いて、敢えて蛇足を加えました。

青少年活動週間（９月14日～20日）を迎えるにあたって

青少年の教育

稚拙を厭うなかれ

第271地区ガバナー
八　木　　寛

「クラブが提唱し、指導してきたインターアクトとローターアクトが、10年、15年たったが、なかなか独り立ちしてくれない。ロータリークラブへの依存度がかえって高まってくる思いがする。」

公式訪問中に私が耳にした、あるクラブの会長の嘆声であります。インターアクトやローターアクトの指導に特に熱心であり、且つ成功しているように聞いていたクラブであるだけに、私には印象的に聞こえました。他のクラブでも、これに似た声を耳にしました。

手続要覧には、青少年奉仕の際のスローガンとして、「各ロータリアンは青少年の模範である」ことが書かれてあります。スローガンそのものは問題はないでしょうが、掲げ方には問題はないかどうか。もっといえば、教育に手を貸そうとするロータリアンが、教育という概念を正しく把握しているかどうか、問い直してみる必要はないでしょうか。

日本語では、教育を受けるということばがよく使われます。このように、標語「各ロータリアンが模範」となって、それを青少年に与えることが教育であると不用意に思っていないかどうか。そもそも、青少年に期待をかけこの教育に力を入れようとするのは、われわれの所謂模範を受け入れる容器としてではありません。若さという未成熟に期待をかけているのです。というのは、若さの中に、やがて成熟するであろう可能が秘められていると信ずるからであります。

したがって、教育とは、与えるのではなくて、青少年の内部に秘められている可能性を引き出すことなのです。教育ということばの外国語で、英語の Education もドイツ語の Erziehung もその語源が「引き出す」であることからも察せられます。このように、教育は外から与えるでなくて、中から引き出すのが本質です。しかも、その引き出すのは青少年が他から引き出されるのではなくて、青少年自らが自分の中から引き出すものであることに注目しなければなりません。

明治時代の倫理学者であり、すぐれた教育者として知られた、杉浦重剛先生にこのような興味ある逸話があります。先生の邸の庭つづきに枯蕪原が広がっていました。いたずら好きの門下生の一人が、これに火をつけたら面白いでしょうねといいますと、先生曰く、

Take
Time
To
Serve

時間を棒げよう
奉仕のために

ＲＩ会長
ロルフＪクラリッヒ

「うーん、わしもそう思う。が、たゞやらんだけぢゃ」　この「わしもそう思う」の一言は、いたずらっ子の門下生に、超模範人物の先生をごく身近かに感じさせ、師弟一体の境地に立たせます。この境地に立つ門下生にとって、「たゞ、やらんだけぢゃ」は、あんな危険なことはやってはならない、という自覚に高まっていく機縁となるのであります。

教育は、相手即ち青少年の若さ、未熟さ、さらにいえば稚拙さを認めることが前提であります。そこから発展への可能性が伸びる源泉なのであって、その意味で、未熟や稚拙は魅力でさえあるといえましょう。世の親たち世の大人たちは、青少年の稚拙を厭い、それをはやく取り去って、いわゆる模範を注入し勝ちであります。これは、青少年の反発を買うか、さもなければ形だけ従う自主性のない青少年に追い込んでしまう恐れがあります。

地区大会でスピーチの八木ガバナー

ＲＩ理事会決議

「クラブの出席率の記録と報告」に対する私の見解

第271地区ガバナー

八　木　　寛

先ず、その決議を次にかゝげます。これは1980年５月～６月のＲＩ理事会の決議の一つであり、「ロータリーの友９月号９頁に掲載されています。即ち次の通りです。

クラブの出席率の記録と報告

クラブ例会の出席率の報告手続を簡易化する必要を認め、各クラブ幹事がメークアップ・カードの提出を待つことなく、毎月最終例会閉会後、直ちに、クラブ会員数及び出席率の報告をその地区のガバナー宛に送付することとする旨を決議いたしました。出席率は時が経つにつれ平均され、そして報告手続をこのように改正することによって、全クラブ幹事が迅速に、統一された方法をもって出席報告を提出することができることになります。

これをお読みになって、どのようにお考えでしょうか。実は、私はこれをＰＩ事務局から大分前に受けとっていました。しかし、これは、日本では出席率の記録と報告に混乱が起きる恐れがあると判断して、しばらく押えておくつもりでいました。ところが、このように、ロータリーの地域公式雑誌に発表されましたので、私の見解を述べて混乱を防ぎたいと思います。

この決議の内容は、一言にしていえば、毎月最終例会の出席率はメークアップの報告を待つことなく、例会閉会後直ちに報告、とあります。出席率について格別几帳面な日本のロータリアンには到底受け入れられないことであります。出席率は時が経つにつれて平均化される、などに至っては尚更肯づけない言葉です。

要するに、各クラブからガバナー事務所への報告がおくれないように、ということが目的のようであります。そうであるとすれば、日本では通信機関が発達していますから、最終例会のメークアップを待っても、幹事が適切に処理さえすれば、支障はありません。

そこで、私は、クラブの出席率と報告については、上述のＲＩ理

事会決議に拘らず、従来通り、即ち最終例会もメークアップの報告を待って出席率をご報告下さい。但し、この機会を借りて申し添えますが、毎月、ガバナー事務所から督促せねばならないクラブが二・三クラブあります。

そのように、ＲＩの決議にガバナーが逆らって宜いのかとのご心配もあろうかと思いますので、私の見解を申し述べます。

この決議に対する私の措置の形式的根拠は手続要覧（P.19）にあります、「出席競争規定の解釈は地区ガバナーに任されるものとする」にあります。また、同じ場所に、このようなことが書かれています。即ち「国際ロータリー理事会の決定のもとに現在出席競争をしていると思われるクラブはない。しかし理事会は地区が地区レベルで出席競争を始めることを奨励している。」つまり、ＲＩの規模での出席競争はなくなったので、地区でやってくれ、従って出席率の報告は要らない、ということになりました。いまでも要覧（P18）に書いてありますが、「翌月10日夜半までに出席報告がガバナーの手許へ、17日夜半までにＲＩ中央事務局へ到達」というようなやかましいことはなくなりました。

つまりＲＩは直接クラブの出席率をあつめることをしなくなったわけです。その代り、地区ガバナーのマンスリーレターに掲載される各クラブの出席率で把握するというわけです。ＲＩのクラブ出席率への関心が鷹揚になった感が私には、このような経過をみると分かるような気がいたします。決議の中に書いてある「出席率は時が経つにつれて平均化され……」というような、われわれには納得しかねるような発想が出てくる基であろうと思います。

要するに、この決議の目的乃至は動機は、出席率の報告の集計が地区ガバナーの許に遅延して困る、というようなことらしく思われます。通信機関の発達している日本では想像できないことです。この決議の背景については、たまたま、６月に開かれた規定審議会に出席した実感から理解できるような気がします。一口にいって、国際ロータリーという連合体は、俗な表現で、ピンからキリまである154ケ国にまたがる多彩なクラブの連合体であるということです。たとえば、あるガバナーが、わが地区には、21ケ国あるのだからといって、規定案の変更を求める説明をしましたが、私は私の耳を疑ったことでした。日本のロータリーの尺度でははかれないクラブが多いということを背景とした決議である、とみた私の判断から私の見解が生れたわけであります。

職業についての私見

第271地区ガバナー

八　木　　寛

ロータリーでは、10月12日～18日を職業奉仕週間ときめて、職業奉仕を強調しています

ロータリークラブはクラブという名の示す通り、社交クラブの一つであります。他の社交クラブと異なる特色は、職業分類制によるところにあります。具体的にいえば、一業種一会員制を原則にしています。つまり、各会員は一つの職業分類を賞与されて、その職業分類を代表し、他の業種の代表たちと接触し切磋琢磨するのであります。この接触、自己改善の機会が毎週の例会であり、そこで生れる親睦のエネルギーがロータリーの各分野の奉仕のエネルギーの源泉になるのであります例会の出席が重視される所以であります。

職業奉仕とは、職業を通しての奉仕ということで、ロータリアンが、互いの親睦を深め自己研鑽を遂げることにより、各自の職業奉仕を高め、それが社会への奉仕となり、更に国際奉仕にも拡大するのであります。職業奉仕が、ロータリー活動の四大部門の中核といわれるわけであります。ところで、職業奉仕ということばが、自明のことばとして使われていますが、そもそも、職業とは何かについて考えてみる必要はないでしょうか。

職業ということばは、もともと、職と業との二語からなる合成語であります。語義の上からも、職業は職と業との二重構造を持っていることは容易に理解できます。そこで、職業の職とは何であろうか。人間が生きるとはこの世で社会的存在として何らかの位置を占めて生きることであります。われわれは先づ家庭という社会で、子という位置を与えられて生き、兄弟姉妹という関係の位置で生きます。その後、家庭外の社会で、あるいは学校の生徒とか、また成人して何らかの職場の何らかの位置で生きるのであります。社会の何らかの位置を占めることは、その位置に伴う役割を持つことであります。英語でこのような位置のことをポスト（Post）といゝますが、それに伴う役割のこともポストといゝます。この役割を果すこと即ち役立つことを英語でサービス（service）といゝます。これが日本語の奉仕になりますと、少しニュアンスが変ってきますが。要するに、職とは、集団的存在としての個人が、連帯の中で果たすべき役割であります。日本語の職分ということばの職がこれであります。

個人が、社会的連帯として担当すべき役割を効果的に果たすには、それに適わしい性格能力が要求されます。従って職には、社会連帯のほかに、個人の個性の発揮が要件となります。こんにち、職を選ぶにあたって、その個人の個性とか能力によることは常識であります。職業というものが発生した古代社会にあっては、その個性や能力がその職に適わしいか否かは、個人本人でなくて、社会が決めたものでした。自己以外の社会が決めるということは、神が決めるものであるとの考え方

から、神のお召し、という語源のＶocatio
ｎ（英語）、Ｂeruf（独逸語）がそれぞれ職業ということばとして現在使われています。

職が個性的であることは、社会の分業化が進むにつれて職を細分化してきました。「専門の白痴化」ということばがありますが、これは、職の個性化、細分化が人間形成にもたらすデメリットをいったものです。極端にいえば、専門化した職は人間をいわばカタワにするということです。職業分類制によるロータリークラブに於て、業種の異なる会員の接触による自己改善が、この「白痴化」を防ぎ人間形成の調和をもたらすという、他に類例を見ない特徴があると思います。

つぎに、職業の業とは何であろうか。職分の職を果たすことによって、報酬が得られます。これを生活の糧とすることを「なりわい」（業）といいます。生業とか稼業とかのことばが使われます。職が、職分として個性を発揮して社会的連帯を実現することを目的とするのに対して、業の方は、職を果たすことによって得られる報酬を目的とするのであります。

職業の発生の祖型は、その特徴は、職的性格つまり公職的色彩を強く持つところにありました。しかし、それは同時に、個性を発揮し、生計を維持する統合活動でもありました。その後、身分社会が確立し、商工業が発達するにつれて、職的職業と生業的職業が分裂するようになり、従来の職分主義に対する営利主義が抬頭してきました。そして、このような生業的職業は、資本主義社会に入るとますます極端になり、営利主義は利己主義的傾向をさらに強くしてきました。職業生活の発達過程はその反面、氏族社会に見られた理想的形態の職業が分解し退化する過程でもあったといわねばならないでしょう。

ロータリーが職業奉仕をあらゆる部門の中核として強調する意味がわかるような気がするのであります。

271地区第４分区フォーラム（卸センター）

ガバナー壮行会

ガバナー事務所

連合年次大会を終えて

第271地区ガバナー

八　木　　寛

中国地方というコミュニティを共にしたわれわれが、管理上の便宜という理由で二つの地区に分割されたのは３年前のことでした。爾来年次大会をはじめ諸会合もわかれわかれで、友愛の輪はせまくなるばかりでした。「ヤァ」、「ヤァ」と久闊を叙したい想いをこの連合年次大会にかけたのは、勿論私ばかりではありません。それが、「因幡路に五県を結ぼう友情の輪」のキャッチフレーズを生み、2,100名に余る大集合になって現われました。交通上の隘路をこえた成功をもたらしました。

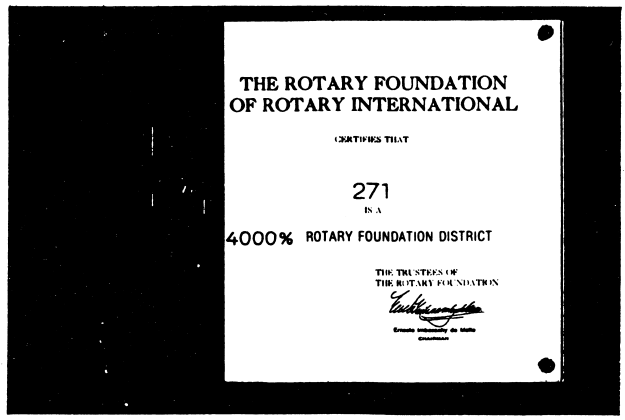
さて、その年次大会は、日本古典文化の粋、能楽「石橋」の演能ではじまりました。まことにユニークな開幕という印象を会員にまず与えたことでした。二日間の大会を省みるとき、大会の形式上のことはしばらく措き、内容の点では実り多いものであったと、主催者の一人として嬉しく思いました。

先ず、会長代理として三宅徳三郎先生を迎えることができたことを挙げたいと思います。先生の言々句々に、ロータリーの哲理がにじんでいて、深い感銘を受けたことでした。感動の余り、私は挨拶の中で、三宅先生の派遣をアメリカでクラリッヒ会長に直接会ってお願いし、更に文書でも要請した、いわば内輪話まで述べたことでした。

記念講演では、小畑勇次郎先生が「生涯教育のすすめ」と題して熱弁をふるわれて聴衆を魅了されました。秋田県知事６期という地方行政の実践の裏づけのもとに、教育実際家のとても及ばない教育の原理を展開されました。

ユニークな企画として成功したものに、二つのパネル・ディスカッションがありました。「ロータリークラブの理事とは」と「新時代に即するロータリー」をテーマとした、まことに活潑にして新鮮な内容の討議でした。フロアからもさかんに発言があって、全会員のディスカッションという実を挙げることができました。

大会の企画、進行の大部分は鳥取北クラブにおまかせしてしまって、私たち271地区ガバナーの側は手をつかねた形で終始してしまって、申しわけないことでした。藤間ガバナーが不幸にも、ご病気のため大会当日は欠席の止むなきに至り、まことにお気の毒でした。しかし、企画はすべて藤間ガバナーの手で行われ、私はただ驥尾に付しただけでした。この大会の成功の因をフォローしてみますと、いずれも藤間ガバナーの着想と執念といってよい熱意が見られます。これを助けた鳥取北クラブの会員に私は敬意を表したいと思います。


THE ROTARY FOUNDATION
OF ROTARY INTERNATIONAL

CERTIFIES THAT

271
IS A

4000% ROTARY FOUNDATION DISTRICT

THE TRUSTEES OF
THE ROTARY FOUNDATION

日本人のR財団貢献

—271地区の4.000%達成—

Take
Time
To
Serve

時間を
捧げよう
奉仕の
ために

RI会長
ロルフ　J
クラリッヒ

第271地区ガバナー　　八　木　　寛

12月初め頃、RI事務総長からガバナー宛の書翰が届きました。271地区ロータリアン諸君のR財団寄付率が4.000%に達する、という貢献に対して心から祝意を表する。これは財団への並々ならぬ支持のあらわれであって、財団管理委員会はプラーク（表彰額）を作ってお届けすることになった。271地区の皆さん、このすばらしい国際的業績に誇りをもって下さい……。このような文面のものでありましたが、間もなくそのプラークが届きました。（写真）

実は、正直にいって私には、あゝそうかぐらいの軽い印象しか残りませんでした。しかしその後私が接したいくつかの文書や情報から、ロータリー財団についての新たな関心が湧いてきました。

去る10月中旬、クラリッヒRI会長が来日して、東北、北海道方面のクラブを公式訪問されたことは、ご承知の通りです。そのときのスピーチの中で（ロータリーの友12月号掲載）、規定審議会の決議80—120に触れて居られます。創立75周年記念の3H運動資金がR財団の管理下にあるのですが、予定額1,200万ドルに対して700万ドルであって、充たない額はR財団から支出してもよろしいというのがこの決議であります。尻ぬぐいをR財団に持ち込むのかという反論もあります。

会長は、この80—120決議に就いて述べて居られますが、私はその内容よりも、日本のロータリアンには是非報告せねばならないという会長の言葉の方が印象的でした。曰く、「現在財団には教育用に充てられる金が6,950万ドルありますが、1982年から3年間に450万ドルまで3H運動に使ってもよいというのが80—120決議であります。この点は、ロータリー財団に対する最初の寄付者のうちである日本の皆さんに報告せねばならな大事なことゝ思います」

さらに特報一つ。これは、12月7日東京で催されたロータリー研究会で、R財団管理委員である上野豊氏の Japanese Language Institute（日本語研修所）設立の報告です。1980—81年度の財団奨学生として日本から国外に留学した138 人に対して、国外から来日した奨学生は僅か10人であったそうです。日本への留学希望が少い理由の大きなものとして、日本語学習の困難があげられることから海外から来日の学生には15ケ月間の日本語学習のための奨学期間を余分に与えることが決まりました。具体的には、東京に日本語研修所を開設（国際キリスト教大学内に）することになりました。これも、日本のロータリーアンのR財団への貢献に対する見返えりと見てよいでしょう。

もっとも興味をひくと思われる資料をご覧に入れましょう。これも、R財団管理委員長からの私宛の手紙です。それによると、昨年度の財団への貢献度が高いので、当地区の奨学生は1名増加して10名採用することに決定したという通知です。この通知も、無知な私には、1名多く留学できて結構なことぐらいの受けとめ方でした。

ところが、RI事務総長の書翰の中に、これに関連した情報があって、私の受けとめ方が浅薄であったことを知らされました。その情報をそのまゝこゝに載せましょう。

「ロータリー財団管理委員会は、1979—80年度を通じて優秀な寄付成績をあげた248のロータリー地区に対して、610件の1982—83年度追加奨学金が支給せられることを発表しました。これは今までにない最高の数です。各地区はすべて1件の奨学金を受けることになっていますが、下記は追加奨学金が授与される件数とその地区です」

追加奨学金9件：257 259 265 271 526 528
〃 8件：262 530
〃 7件：263 268 366 532
〃 6件：260 261 266 279 345 457 522
追加奨学金5件：252 254 255 256 258 270 275 367 517
〃 4件：175 250 251 267 269 273 346 365 448 461 513 524 533 534 573 733 762
〃 3件：163 171 183 186 188 190 207 217 235 253 314 330 493 500 502 503 508 511 516 536 549 550 567 583 587 595 600 605 619 620 627 631 640 642 644 649 694 699 723 725 739 747 760 764 793 795 930 935
〃 2件：162 168 177 182 184 196 204 211 236 237 319 326 380 382 411 455 460 464 506 519 547 555 563 571 577 579 581 584 589 591 607 609 611 615 629 645 667 678 684 690 695 696 700 704 707 709 721 726 745 749 769 777 781 791 798 932 963 994
追加奨学金1件：101 106 109 110 111 113 116 117 119 124 139 166

169	170	174	176	181	185
187	189	199	206	232	233
234	238	239	247	309	311
327	368	385	410	416	417
437	440	446	463	469	486
489	491	492	545	552	565
575	593	597	622	625	633
636	638	646	651	654	656
658	660	663	665	676	686
688	692	701	712	715	717
730	743	751	757	763	767
771	173	782	785	787	910
927	945	946	955	960	965
968	969	970	971	980	982
983					

こゝで、私の註釈を加えます。
先ず、追加件数(aditional award)とは見なれないことばです。世界のロータリーの地区は、その大小にかゝわらず、すべて奨学金１件は受けることになっています。それで、財団寄付の成績によって追加する奨学金の件数を意味するわけです。

寄付成績優秀な248 地区とあり、その見かえりとして610 件を追加することになったと書いてあります。追加件数を受けない地区がどのくらいあるかという私の興味から、調べてみますと、世界のロータリー地区が373 地区ありますので、追加を受けない地区が125 地区あることになります。大ざっぱにいって、世界のロータリーのうち、1/3地区は、財団の寄付どころでない地区と見てよいでしょう。また2/3の寄付優秀地区といっても程度がまちまちでしょうから、寄付率に段階を設けて追加件数を決めたものと思われます。それが上記の表です。

表の地区番号のアンダーラインは私がつけました。日本のロータリー地区です。これですぐお気づきになると思いますが最上位の追加件数９件（基本件１件を合せて10件）のランクに６地区ありますがそのうち、わが271 地区を含めて４地区までが日本のそれであります。現在日本には24地区ありますが、いずれも上位のランクを占めていることにお気づきでしょう。追加件数の1/4強の160 件が日本に割り当てられたことになります。

いまになって、R財団の事業について認識を新たにするとは、はずかしいことですが、正直に告白する次第です。財団の教育補助という事業の意味をはじめて身近かに考えるようになりました。

あとの半歳

― IGFのことなど ―

第271地区ガバナー

八木　寛

われわれの年度の半分が終わりました。折り返えし点を過ぎたマラソンのランナーの心境がわかるような気がします。マラソンの場合、勝敗がきまるのは後半であります。ロータリーの場合、あるべきロータリーの姿が現われるのは後半だと私は思うのです。前半では、新しい年度としてやる気十分で張り切ります。ロータリーのタテマエ論が表面に出て、ガバナーの公式訪問はその展示場となるわけです。ですから、公式訪問が終わるとクラブの役員は任期が終わったような気になるものとあります。年次大会が終わり、12月の次年度の理事選挙が終わり、次々年度の会長ノミニーまで決まると、いよいよ万事終わったという気になるものです。しかし、このリラックスしたときが、ロータリーらしい発想と実践のできる時期と私は思うのです。ロータリーを正しくエンヂョイできるときが、この後半のリラックスしたときと私は思います。

日本の文部省でさえ、「ゆとりのある学習」というキャッチフレーズで、学校のカリキュラムを転換しょうとしています。人間の能力の開発が教育の目標であると張り切った日本の学校教育が、人間性の干からびた人間を作る結果を生じてきて、慌てているのが文部省です。教育の目的は人づくりである。その人づくりの目標として能力づくりに張り切りすぎて、人づくりが不完全になったことへの反省が、「ゆとりのある学習」の提唱でしょう。日本のロータリーにも、この観がなきにしもあらずといえないでしょうか。

先日、"Worldwide rotaract directory"という冊子が私の手元に送られてきました。その中に、世界のローターアクトの分布状態が世界地図の上に示されているものがありました。それによると、日本のローターアクトの数は376となっています。これに対して、アメリカが97しか設立していないのは意外でした。日本がアメリカの約４倍のローターアクトを持っているのです。しかもロータリークラブの数はアメリカ6,000、日本1,500ですから、クラブ数でアメリカの４分の１の日本が、アメリカの４倍のローターアクトを持っているというのです。この現象はどう見るべきでしょうか。日本ロータリーの青少年奉仕の盛況と誇ってよい数字でしょうか。

公式訪問の際、インターアクトやローターアクトを提唱しているクラブで、タテマエとして口には出しませんが、持て余している姿が見受けられました。私はいゝました。組織を作るには、クラブ内ならば試行錯誤も許されるでしょう。これはクラブ外に設けるものであり、しかも青少年を対象とするものであ

る。うまくいかねばやめたらいゝではすまない性質のものである。殊にインターアクトは学校という国の制度の中に部外から入るのである。慎重の上にも慎重を、と繰り返えしました。ところが、この助言を聞いて、救われた思いがすると打ち明けたクラブの役員がありました。インターアクトやローターアクトを作らぬクラブは欠陥クラブと見られることを恐れる向きもあるらしいのです。

余り張り切らないで、リラックスした気分でロータリーをエンヂョィしましょう。その方が正常なロータリーが育つように私は思います。その意味で、年度の後半のリラックスした時期がそれだと思うのです。それかあらぬか、ＩＧＦがこの時期に催されます。

ところが、そのＩＧＦが、依然としてタテマエを演説する場になっていないでしょうか。近隣クラブが相寄って、互いに問題となるところを論じあったり、失敗談を披露しあったりするところに意味があるのではないでしょうか。井戸端会議という、庶民階級の主婦の間に自然発生的に生れたフォーラムをＩＧＦに取り入れたいと私は思うのです。ところがＩＧＦを催すにあたって、おごそかなセレモニーから始まるのが習慣になっています。国歌やロータリーソングで緊張させてしまいます。リラックスした、本音を出し合えるＩＧＦにしたいものです。

いま一つ、今年に限ったことかも知れませんが、ＩＧＦに際してガバナーとして期待するものがあります。従来、ＩＧＦではガバナーはお客のような形で、形式的な挨拶のような発言の機会が与えられるようですが、少くなくとも今年の場合、実質的発言の機会が与えられるようにお願いしたいと思います。それは、私の公式訪問の時の発言のツケが私にまわってくるはずと考えるからであります。

公式訪問での私の発言が、既に定着していた水面に波紋を起こしたやに聞き及びますし、また私自身の不用意の発言もあって意が十分通じないものもありました。私の提唱した、「見直せ出直せ」は種々の議論を呼ぶべきもので、波紋を起こしたこと自体は、私はガバナーとしてむしろ一つの貢献とさえ思っています。したがって、その波紋が波紋を呼び、それがＩＧＦのトピックにでもなって、ガバナーも出て来てしゃべれ、ということになると面白いことになると思いますが、どうでしょうか。たとえば、出席率の問題、インターアクトやローターアクトの問題など、訪問の際の私の八方破れの発言に対するツケを処理する責任が私にはあると思うのです。

エリート談議

― ロータリーとエリート ―

第271地区ガバナー
八　木　　寛

ロータリアンのＡさんとお茶をのんで、しばらく雑談をたのしんだことがありました。Ａさんがクラブの会員増強に一役買ったときの述懐談が私の興味をひいたことから、終りかけた茶話がまた盛り返して、コーヒーを追加註文したことです。

Ａさんの話によりますと、新会員増強の正規の手続きを経て、候補に直接勧誘する段階になって、Ａさんがその役に当ることになりました。ところが、入会を拒否するというほうがあたるような辞退の回答を受けたのです。「エリート臭フンプンたるロータリークラブはかねて私の好まぬところ、いわんやその仲間入りはご免だ」というわけです。相手は立派な紳士ですから、言葉は礼を守って丁重ですが、趣旨からいえばこのような論理なのです。Ａさんは、こんにちのロータリーが昔とちがって、特権的意識はないことを主張し、説得これつとめたけれども、その日は引きさがるほかありませんでした。

Ａさんは、またの日を期してその日は帰りましたが、中間報告として委員会や理事会に経過報告をしておきました。ところが、クラブの方では空気が硬化して、そのような認識不足の人、そのような偏見の人は入会させぬ方がよいとの意見が強くなってきました。そして、縁なき衆生は済度し難しの結論になったのだそうです。

私たちの話題はしばらく、そもそもエリートとは何ぞやの論に移りました。エリートという外来語は在来の日本語でいえば、選良ということになりましょうか。選ばれた良質の人々の意味になります。選ばれたというのは必ずしも代議制的な形式でなくても、一般の人たちから良質の人たちと目された人々という意味でしょう。そうであれば、ロータリアンがエリートといわれても一向差支えありません。

ところが、エリートなることばが、「特権階級」というニュアンスを以て使われるようになり、しかもこの方が一般によく使われるようになりました。「特権階級」とは、その反対語の庶民とか大衆とかとちがった別の世界の、庶民に優越した特殊の階層階級というニュアンスを持ちます。これでは、勿論こんにちの社会で承認さるべくもありません。人類の平等を理念とするのがロータリーであること勿論です。こんにちのわれわれ日本のロータリアンにとって、「ロータリーの庶民化」は一つの課題ではないでしょうか。勿論、これは格下げを主張するのでなく、一般社会の人々との間の格づけの差異などあるべくもない、との主張です。

最初のロータリークラブである、シカゴクラブの綱領が、会員の職業上の相互扶助であったことは誰も知ることです。即ちロータリーの原点がクラブ内の友情のもとに、お互いの物質的扶け合い運動でありました。そこで、

当初のクラブでは、会員の誰が誰に何を援助したというような実績を記録し報告する役目、いまでいうクラブ委員を設けたそうであります。現在のわれわれからみれば、低次元の運動であります。

この次元の低いロータリー運動も、当時の社会情勢からみれば当然のことでありました。即ち20世紀初頭のシカゴは、アメリカ東部の移民が西部へ流れ込む中継都市であって、その移民の民度の低劣からくるいろいろな社会問題の渦の中にありました。資本主義的事業は私利私欲中心で、食うか食われるかの闘争の場でありました。このようなシカゴでしたから、商業上の倫理性の欠如の上に築かれた高度の文明と同時に、凶悪な犯罪や悪徳が横行する都市でありました。シカゴのロータリアンは、そのさ中にあって、先ず激烈な生存競争にたちむかわねばなりませんでした。会員お互いの物質的扶け合いがロータリーの原点であったことが理解できます。

ところがあるとき、新会員として迎え入れようとした候補から、手痛い批判が浴びせられました。「限られた会員の間の相互扶助は所詮クラブの利己主義ではないか。そのような狭い利己主義は私の好まぬところ、いわんやそのグループの一員になることはご免だ」という論拠の入会拒否です。これを聴いたクラブは、反論が出たり激昂する者も出たりで、一時騒然としました。その時のポールハリスは、謙虚に素直にこれに耳を傾けたそうです。その批判を全面的に受け入れ、その候補を迎えいれ、さっそく綱領を改めて一項加えました。「シカゴ市の利益を推進し……」がそれです。会員相互の扶け合いという限られた友情から、広い地域社会という意識に拡大したいきさつは興味をひきます。

ポールハリスが、こんなことをいっています。「この世は常に変遷する。われわれは変遷する世界とともに変遷する用意がなくてはならぬ」と。「会員の相互扶助は所詮クラブの利己主義に過ぎない」との批判に、直ちに謙虚に対応できたポールハリスのことばらしいではありませんか。

しばらく楽しんだ雑談が、発端になったAさんの会員増強の経験談にかえってきました。

Aさんが推せんしたその候補は実に立派な人材で、惜しい人材を逸した思いがしてならないといっていました。話を聴いている中に会ったこともない人ですが、その人柄がすでにロータリアンに思われてきました。済度し難いのは、クラブの外にあるその候補でなくて、むしろロータリーの内側ではないだろうかといってはいゝ過ぎでしょうか。

Aさんと別れるとき、私はもう一度その推せんした候補の入会に骨折ってみるように勧めてみました。こんどは相手の論を承認する立場をとるように助言をし、このようなことをいゝ添えました。「日本のロータリーは昔は、いわれる通り、エリートであったことは事実です。日本ロータリーの沿革からみて止むを得ない面もあったのです。しかし、いまは随分変ってきました。少くとも時代の動きとともに変ろうとしています。ご指摘のように、われわれの中にはまだ悪臭が残っていることは否めません。そこで、是非入会して悪臭の払拭に力を貸して戴きたいのです……」

私の助言に動かされたように思われましたが、「クラブの空気が……」と独語ともつかぬ一言を残して別れたAさんでした。この件についてはその後何も聞くこともなく日が過ぎました。

Take Time
To Serve

時間を捧げよう
奉仕のために

RI会長
ロルフ.Jクラリッヒ

ロータリーの広報

ロータリーの社会奉仕の独自性

第271地区ガバナー
八木　寛

Take Time
To Serve

時間を捧げよう
奉仕のために

ＲＩ会長
ロルフＪクラリッヒ

陰徳を貴しとする考えから、私はロータリーの社会奉仕は陰徳であるべきだと考えていました。それで、ＲＩがしきりに広報活動に力を入れよと指示することに対して、納得出来ないところがありました。陰徳を広報する如き、矛盾ではないか、と私は反感を持っていました。

地区協議会とは、次の年度の各クラブの幹部のための教育を目的とするものであり、又力を入れようとする部門を強調する会合ですが、昨年の六月に私がリーダーになって催しました。ＲＩから、広報委員長を招集すべき幹部に入れよと指示されました。ＲＩの役員であるガバナーは当然この指示に従うべきですが、納得がいかないことは出来ない私は、広報委員長を招集しませんでした。このようなロータリー陰徳論を持ってガバナーに就任しましたが、公式訪問でクラブをまわっている中に、私の陰徳論が粗雑な、独断論であったことに気づきはじめました。就任後、数週間もたってからのことです。おソマツなガバナーで、お恥ずかしいことです。

各クラブを訪問するうちに、広報委員長が困って居られることに気づきました。マスコミがこちらの情報を取りあげてくれぬ嘆きは共通したものです。そんなことから、広報委員の仕事はマスコミ関係者と席を設けて顔つなぎをするなど、末梢的な手段で終るか、広報に値せぬ情報を世間に流す結果になったものもすくなくありません。このようなクラブ訪問を重ねている中に、私の陰徳論に手直しをする必要を感じはじめました。

強いていえば、ロータリーの社会奉仕は陰徳でも陽徳でもない。陰徳以前の奉仕といってよいでしょう。ロータリーの社会奉仕は、よくいわれるように、社会のニードを求めてそれに対応しようとする活動です。しかも、ロータリーはひとり善しとするものでない。他に共感者が現われて相携えて奉仕することによって、ニードへの対応がより効果を奏することになるのであります。ロータリーの社会奉仕は、それが弱少な奉仕であっても、これに誘発されて他の人たち若しくは団体が、共鳴し協同して社会のニードに応えるならば大きな力になるものです。ロータリーの社会奉仕に触発されて、他の人々の奉仕活動が始動するようになれば、ロータリークラブは、そこから手を引いて他のニードを求めるのであります。ロータリーの社会奉仕は、継続よりは単年度を本旨とするとはこのことであります。

ロータリーの社会奉仕が、いわば起爆剤的

役割であるところに独自性があるとすれば、これを陰徳なりとしてひそかに奉仕をしたのでは独自性が発揮出来ないでしょう。そこで社会のニードに応えようとするロータリーの奉仕を広報する活動がむしろ当然必要になってくるわけです。広報によって、一クラブとしての小さな奉仕が、他の人々若しくは団体の共鳴を呼びおこし、奉仕の輪が拡大し、いわゆる世論として定着することさえある。世論となれば、行政も取り挙げざるを得なくなります。こんにちの福祉行政も、かつては一個人の篤志、一慈善家の行為であったものが少くありません。

クラリッヒＲＩ会長が云っています。飢えた人々に魚を与えることは真の救済ではない。彼等に釣糸を与え釣り方を教えることこそ救済である、と。恵み与えた魚は、それがいかに大きくとも、量がいかに多くとも、食べればなくなる。また飢えて恵みを待つほかない。漁獲法を身につけたものは、無限に魚を手に入れる、生産意欲が起る、生産が拡がる、かくて豊かな人生が拡がるわけです。

公式訪問に先だって、各クラブから活動計画書がガバナーへ送られます。ガバナーはそれをよく読んで訪問をするわけですが、あるクラブ会長の運営方針として述べられてある中に、市民から、ロータリークラブがこの街にあってよかったと思われるようなクラブにしたい、とありました。勿論けっこうなことです。しかし、具体的な活動と思われるものに、何か市民が目を見はるような施設を作って寄付しようという計画があげられてありました。これに類する計画が、いくつかのクラブに見受けられました。私は、他の奉仕団体と奉仕の量を競うなかれ。競うとすれば奉仕の質を以てせよ、と論じました。

奉仕の質とは何ぞや。インテリジェント・サービスといいましょうか、思慮深い奉仕、これだと思います。クラリッヒ会長のいう、魚を与えるのは単なる慈善行為であって、ロータリーの本旨でない。釣道具を与えるというインテリジェンスのこめられた奉仕こそロータリーの独自な奉任というべきでしょう。

いま述べましたように、ロータリーの奉仕は、起爆剤の役割を果すことによって、奉仕の輪が広くかつ永遠に広がることを念ずるものであります。こゝにロータリーの広報の意義があります。したがって、ロータリーの広報はロータリーの宣伝ではありません。ところが、宣伝と解されているような広報がよく行われています。少し極端にいえば、ロータリーの名は知られずとも、社会のニードにかく取り組み奉仕するものあり、との情報を一般社会に伝え共鳴を訴えるのがロータリーの広報活動であります。

広報の目的がこゝにあるとすれば、その内容もおのずからきまってくると思います。ところが、クラブの奉仕が魚を貧者に恵むような奉仕に終って、ロータリーの独自性から離れてしまっては、広報の内容にならないと思います。それを無理矢理に広報すれば、それを受けた一般社会がロータリーを何と見るでしょうか。奉仕を誇らかに宣伝するような印象を受けないでしょうか。その奉仕が若し金銭的負担が大きかったり、エリート臭のプンプンたるものであったりすれば、一般社会から共鳴を得るのでなくて、エリートの単なる慈善行為としてソッポを向かれてしまう恐れすらあるでしょう。起爆剤的奉仕がロータリーの奉仕の性格であると繰り返えし述べましたが、こゝに陰徳性があると思います。ですから、このような奉仕は広報することに何の矛盾もないわけです。

たとえば、ロータリー財団の奨学生が決定した際、奨学生が選ばれたクラブは広報の絶好のチャンスです。ロータリーのインテリジェント、サービスの代表的な大きな企画ですから、この機会に広報することは、国際理解

世界平和への深い思慮あるプロジェクトとして一般社会の共鳴を呼ぶのに役立つことでしょう。この企画への参加がポールハリス・フエローという、誰でも参加できる窓口が開かれてあることも紹介されるべきです。このことは、単にロータリー以外への広報でなくてクラブ内への広報も必要でしょう。ポールハリス・フェローの称号はロータリアンに限られると思い込んでいるロータリアンも少くないことも事実ですから。

正岡パストガバナーと八木ガバナー

そこはかとなく書きつづる

ロータリーよしなしごと

第271地区ガバナー
八木　寛

「私は本山にお詣りしてきたのではありません。ＲＩ会長という教祖のご託宣をいたゞいて帰ったのでもありません」

昨年の六月末、国際協議会から帰って地区協議会で、就任直前のガバナーとしての私の第一声がこれでありました。少し気負い過ぎた発言という躊躇が内心ないでもなかったことを、今でも記憶しています。

また、公式訪問の際、予め各クラブから活動計画書を受け取りますが、その中で目に止まり気にかゝりましたことは、エバンストンにあるＲＩ中央事務局をどのクラブもＲＩ本部と称していることでした。訪問の際、小さいことですがと前置きして言及してまわりました。

実は、私も本部と称しても誤りであるとまで断言するほどのことではないと思っていました。エバンストンの中央事務局に、ＲＩ会長の部屋があり、事務総長が一切の事務を統轄し、ＲＩ理事会もこゝで開かれるのですから、通俗的な日本語の表現を以てすれば本部といっていゝと思います。しかし、central office という看板をかゝげ公式にも中央事務局と訳されているものを本部というのはいかゞであろう。ＲＩではまちがってもHead Quarter（本部）ということばは使わないと思います。これは、日本人の中にある主体性を欠く体質と無関係ではないような気がします。

ガバナーとしての第一声に敢えて気負いぎみの啖呵を切り、また本部ということばにこだわる小心な発言さえしたのは何であったか。いま私は自らに問うています。日本のロータリーが急速な成長をとげて、発祥の地アメリカに次いで世界第二のロータリー大国になったといゝます。しかし、数的成長はどげたが質的進歩したであろうか。孔子のいう「同ジテ和セザル」小人の道を歩んでいないであろうか。中央事務局にあって、世界の各クラブに向って呼びかける、理事会なり会長なりの提案や助言とか示唆を、信者がご託宣をおし戴くように、金科玉条として守る体質が日本人のわれわれには残っていないであろうか。中央事務局をわざわざ本部と称するのは、その名残りの一つと私には見えました。中央事務局からは、注意深く、各クラブが主体的であるように、助言とか示唆とか、好ましいとか好ましくないとかの表現を使ってくるのであるけれども、それを指令とか禁止とかに受けとる姿勢が残っているのではないでしょうか。

具体的で顕著な例をあげてみましょう。ＩＧＦのトピックにもなりました。クラブ細則に、会員増強の際の６段階の手続があげてあります。それによると、第１～３段階を経て推薦者がはじめて入会候補者に呼びかけ、申込書を受けとる（第４段階）。然る後理事会は会員に公表し異議あるものは10日以内に文書を以て申出るように求める（第５段階）。異議

の申出のない場合、正式入会決定（第６段階）という段取りになっています。ところで、第５段階で異議が出て理事会が入会を否決した場合はどうなるか。勿論、候補者にそのことを伝え入会が拒否されたことを伝えねばなりません。これは、候補者にとって非礼極まる仕打ちであり、推薦者の面目も丸つぶれであります。あり得るケースであります。現実に起きて、推薦者の退会とか関連したトラブルが起って、拭い切れないしこりが残っている例があると聞きます。

私は、至極簡単に考えます。４段階と５段階を入れかえたらいゝと思いますが、どうでしょう。クラブ細則の冒頭の欄外の注を読めば立ちどころに解決するではありませんか。読んでみましょう。「本細則は単に推奨されるに過ぎない。従ってロータリークラブは、クラブ定款又は国際ロータリー定款、細則と矛盾しない限り、クラブ自身の事情に応じて変更することができる。……」と。このようにクラブの事情に適合させるように、とわざわざ注意が冒頭に掲げられてあるのに、推奨された条文を金科玉条と守ろうとする日本ロータリアン、日本人の体質の然らしめるところとでもいわねば説明がつかないでしょう。試みに、私は数クラブのクラブ細則を見せてもらいましたが、いずれも、推奨条文がそのまゝ生きていました。

昨年シカゴでありました規定審議会に出席しました。これは、各地区代表４００人による定款細則や決議などを審議する、いわばロータリーの国会です。われわれ各クラブが遵守すべき定款、細則などは、各クラブの主体的意見が盛り込まれて民主的手続きのもとに制定されるわけであります。新米議員よろしくの体で私は、投票権者という定められた席に腰をおろして、賛否を問われるときだけ立ったり坐ったりしました。驚きましたことは、地球上のどこにある国だろうかと思われるような地区代表が、次々に立って発言するのです。そして、それぞれの国情を訴え地区の立場を主張して、規定の新設や変更を求める発言をするのです。

日本人は24地区あるのですが、殆んど発言はありませんでした これはどういうことでしょう。世界第二のロータリー大国の驕揚さという解釈は無理なようです。

ロータリーにおけるアメリカの発言権も、往年の勢いでなくなりつゝあるようです。25年前のアメリカのロータリアンの数は全世界の65％を占めていましたが、現在は40％に落ちています。これはアメリカ以外の国のロータリアンの増加を意味します。その中でも著しいのが、日本のロータリーです。25年前の1.5％に過ぎなかった日本のロータリアンが現在では世界のロータリアンの約１割を占めて、アメリカに次ぐ第二のロータリー大国になっています。昨年の規定審議会で最も注目を浴びた議案が、ロータリーに婦人会員を認める提案でありました。この案は理事会の提案で、女子会員を認めないロータリーは、女子を差別するという非難がたかまりアメリカでは社会問題になっている。このことはロータリーの浮沈に関する重大問題だから、是非通してくれという事前運動が随分早くから行われていました。３時間に余る討論の結果、原案は却下されました。事前運動が

Take
Time
To
Serve

時間を捧げよう
奉仕のために

ＲＩ会長
ロルフＪ
クラリッヒ

浸透しているように私は思っていましたのでこの結論は私には意外でした。討論の終り頃でしたが、元R I 会長という人が熱弁をふるいました。「提案者は、これが通らないとアメリカではロータリーは社会的制裁を受けるであろうとか、今にも、アメリカのロータリーが衰退の一途を辿るほかないとかいうが、ロータリーは今やアメリカのロータリーではない。154ケ国にまたがる世界のロータリーである。アメリカ人よこのことを忘れてはならない」と。この熱弁は私の印象に強く残りました。

第二位のロータリー大国といわれる日本のロータリーが数的な成長から質的な成熟をとげることは、国際ロータリーからも期待されることです。われわれに次ぐ国がどのようなものであるかを知っておくことも参考になろうかと思いますので、次に挙げてみましょう。300クラブ以上の国をあげてみます。

	クラブ数		クラブ数
アメリカ	6.039	アルゼンチナ	607
日　本	1.508	カナダ	488
ブラジル	1.169	ドイツ	462
英　国	1.112	スウェーデン	404
インド	933	イタリー	370
オーストラリア	897	メキシコ	314
フランス	652	韓　国	301

続

ロータリーよしなしごと

― 不易流行 ―

第271地区ガバナー

八　木　　寛

ポール・ハリスが、昭和10年のこと、第3回太平洋地域大会出席のためマニラを訪れる途中、日本へ立寄ったことがあります。そのとき、日本のロータリアンの一人との間に交わされた会話の一節が伝えられています。

「あなたがロータリーを創立されたとき、こんにちのような巨大な組織が予測されていましたか。」

「いゝえ、とんでもない。たゞ淋しかっただけです。淋しいので集って話し合おうとしたのです。」

ロータリー創設者の口から出た、創設の動機についてのこの言葉は、対話したご当人には何と聞こえたことであろうか。私には、素朴単純で少しセンチメンタルに響きますが、これをたぐっていくと、ロータリーの原点に辿りつくように思われます。

ロータリーが創立された1905年という時代がどういう時代であったか。シカゴという街はどういう街であったか。それはアメリカの東部から西部へおびたゞしい移民が流れ込んだときであり、その中継都市がシカゴでありました。民度の低い移民の群れがもたらす社会問題が、マンモス都市シカゴの繁栄の中に充満していたであろうことは想像に難くありません。資本主爛の瀾熟期に入り、私利私欲中心の喰うか喰われるかの闘争のルツボに、人間は埋没されたことでしょう。田舎育ちのポール・ハリスが孤独感にさいなまれたのは自然のなりゆきであったでしょう。

このような時期、このような街に生れたシカゴ・ロータリー・クラブは、喪失した人間の恢復を念じて、先ず会員の友情を深め親睦を厚くすることを目的とし、それが自然に会員の相互扶助活動に進みました。ところが、その会員の間の相互扶助は、ロータリーの外からみれば、所詮利己主義に過ぎないではないかという反省が起って、ロータリーの対社会意識が生れてきました。そして、その対社会意識が地域社会の「人間」への愛情、相互扶助に拡がったのであります。こんにちのロータリアンが口にする、親睦と奉仕の原点であろうと思います。

人間の生活意識は、小は家庭から近隣社会へ、市町村、国へ拡がり、遂には国際社会にまで拡がります。ロータリー・クラブの組織もシカゴ・クラブにはじまって、アメリカ国内組織から、いまや154ケ国にまたがる19,000クラブ、88万余のロータリアンを擁する巨大な国際ロータリーに発展しています。原点であった「人間」の恢復・増進が、隣人愛を生み人類愛にまで拡大したわけであります。

国際ロータリーは75周年記念の運動として３Ｈ運動を展開しました。これは、保健（health）、饑餓追放（Hungry）、人間性尊重（Humanity）の三つのＨであることは知られる通りです。保健にしても饑餓追放にしても、疎外された「人間」の恢復・維持・増進をめざし、また人間性尊重も人間（human）らしさ（ｰty）という人間の内面性を強調しています。４半世紀前、ポール・ハリスが淋しくてならなかったという人間疎外からの恢復、「人間」の復活・維持・増進というロータリーの原点がこんにちそのまゝ謳い出された観があるのが３Ｈ運動であります。

ロータリーの原点は、時代の推移、地域の拡大、国際化に伴い、多彩な変化無限の発展を遂げつゝあります。しかし、その変化の中に一貫して変らぬものが原点です。不易流行とは芭蕉の言葉といわれます。不易の原点として、常にロータリーの中心概念であったものが「人間」であったと私は見るのです。しかも、この「人間」が、３Ｈの人間性の尊重という内面性の強調の外に保健とか饑餓追放とかの具体的な「人間」であるところにロータリーの「不易」があり、それが限りない「流行」となっているのではないでしょうか。この立場をロータリーの実業の倫理主義と人はいゝます。宗教的立場をとろうとする人には不満なところでしょう。

ロータリーの標語として公式に採用されていますものに「超我の奉仕」“Service above Self”があることはご承知の通りです。ところが「超我」とはどういう意味でしょうか。自明の言葉として、利己心のない宗教的ニュアンスのものとして使われていないでしょうか。この標語が生れる前に使われていた標語は“Service, not Self”でありました。直訳すれば「奉仕、利己にあらず」となりましょうか。しかし、利己否定は人間否定であって宗教的でありすぎるとして、却けられて現在の「超我の奉仕」が採用されたということです。利己と利他という、相反するものを併せ持つのが現実のなま身の人間です。その矛盾をアウフヘーベン（止揚）しようとするのが“above Self”（超我）であります。

ところが、哲学的なこの表現は日本人にまた“Service, not Self”（奉仕、利己にあらず）の標語に逆もどりさせる観があります。自明の語として唱えることが一層その感を深めます。「超我の奉仕」を「利他第一、利己第二」と訳した人があります。意訳として適訳ではありますが、標語の表現としては「超我の奉仕」の方が日本人の好みに合うようです。

戦時中、「滅私奉公」ということばがよく使われました。私も美しいことばと思いました。ところが、安易に「滅私奉公」を唱えた人が、戦後は「滅公奉私」に鮮やかに転身した例も少くありません。利己と利他を併せ持つのか現実のなま身の人間であることを知れば、「滅私奉公」など安易に口にできません宗教でないところに、世界の人々の間間に拡がる魅力があると私は考えます。

日本ロータリーを動かすもの

― 不文律の二三 ―

第271地区ガバナー

八　木　　寛

とうとう最後のマンスリーレターになりました。

ふりかえってみますと、地区内50のクラブを訪問したわけですが、不思議に記憶に残っていません。何故でしょうか。例会の形式が一様で、ヴァライエティに乏しいことが理由の一つではないでしょうか。例会の順序は、会長点鐘。国歌。ロータリーソング……と、どのクラブも同じです。

例会のプログラムについては、本来全く自由な筈ですが、日本では殆んど一律です。それに公式訪問の際国歌が歌われるのはどういうことでしょうか。恐らく毎例会に奉唱しているのではないと思いますが、ガバナー来訪ということでこれを入れたとすればいかがなものでしょう。国旗も国家としての意義のある際に掲げるべきものでしょうから、ガバナーの公式訪問だからでは、少し大げさにいえば国旗国歌の冒瀆ではないでしょうか。

それは兎もかく、国歌奉唱の際、正面の国旗に向って奉唱するのは当然であります。そこで、メィンティブルの役員もガバナーも「まわれ右」をして国旗に対面します。国歌がすむとロータリーソングになります。私はまた「まわれ右」をしてロータリー旗を背後にします。国旗に向っていた会長幹事などの役員たちは国旗から並べて掲げてあるロータリー旗へ目を向けます。会員はそろってロータリー旗へ目を注ぎます。(中には私と同じように向きをかえる役員もいることがありますが)国歌は国旗に向って奉唱するのが国際的にも儀礼でありますが、ロータリーソングはロータリー旗に向ってさゝげるべきものでしょうか。

ロータリー旗とはそもそも何でありましょうか。民族の運命共同体としての国家のシンボルとして尊重すべき国旗と同等には考えないにしても、ロータリー旗をそれに類するものとして尊厳の対象にしているのでないでしょうか。あるクラブ幹事が、ロータリー旗に目礼して例会場に入るといわれたことを思い出します。国際ロータリーとは世界のロータリークラブの連合体のことであり、共通の理想を持つクラブの連合体のしるしが旗なのです。クラブという名称の示す親睦集団の連合体のしるしがロータリー旗でありますから、尊厳の対称とする性質のものではありません。さればといって、粗末に扱うべしと申しているのでは勿論ありませんが。

そこで、ロータリーソングとはそもそも何かに触れる必要がおこります。例会は、点鐘に続いてロータリーソングによって始まることに、日本では定着しているようです。しかしこんな決まりはどこにもありません。日本のロータリーでは、何かの集まりがあると、オープニング・セレモニーとして、どうして

もロータリーソングがあります。公式訪問のとき、例会に続いてクラブアセンブリーがありますが、又ロータリーソングを歌うのです。いくつかのクラブで、私はそれを止めてもらったことがありました。ロータリーソングの本質は会員が童心にかえってフランクに発言できる空気をつくるところにあります。したがって奉仕の理想を謳うよりも、無心にかえる内容の方が適するわけです。

ポカラトーンの国際協議会では一週間、毎朝９時に講義が始まりました。８時50分頃になると、その大講堂のステージにソングリーダーが伴奏の女性を伴って現われて歌い始めます。われわれの机の上に配られた歌集何ページを開けといって、われわれを歌に誘い込みます。ときには、「いまのはダメ……。もう一度一しょにハイ……」「そう、そう、こんどはとてもウマイ……」という調子で、学校の子供に歌わせるよう、大の大人に声を張り上げさせたり、腹を抱えて笑わせたりします。そして９時になると、「ハイ９時になりました。会長どうぞ……」これで会長の点鐘となるのが常でした。

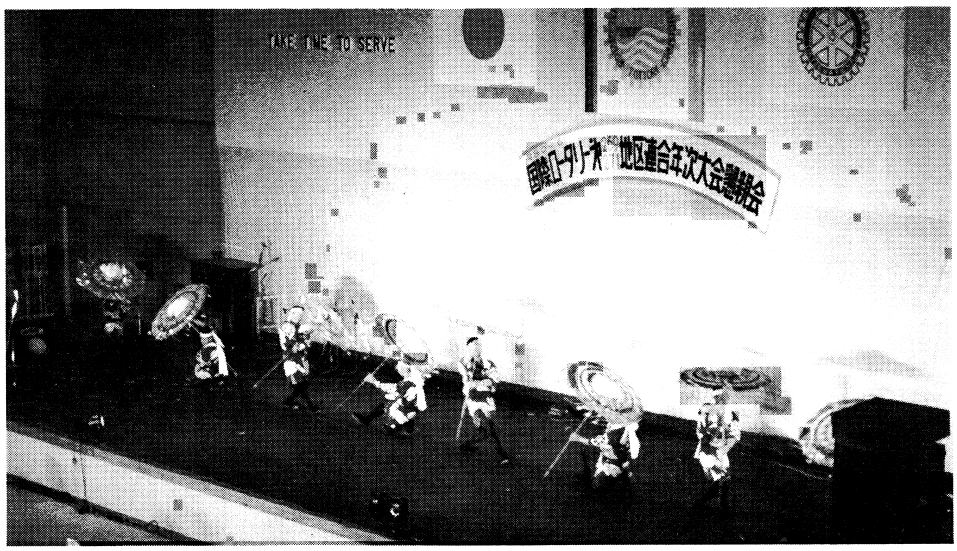
日本では、ロータリーソングがセレモニーの一部になってしまいました。ロータリー旗に向って歌うのですから堅苦しい歌い方になるわけです。クラブによっては、ロータリーソングの本質からして、ロータリーの理念を内容とせずとも誰もが歌えるものを選ぶ場合もあるようです。しかし、それがセレモニーの中に入ったのでは「箱根の山は……」も「夕やけこやけ」もかた苦しいものになってしまいます。

日本のロータリーには、はっきりした拠り所があるわけではないが牢固とした拘束力を持って支配するものがあるようです。その一つに、ロータリーでは会員の呼称は二人称でも三人称でも「××君」と呼ぶという不文律があります。その根拠は、強いていえば、会員の平等を表現しようとする手段であったろうかと思われますが、特権的階層によって構成された時代はともかく、今日のロータリアンにはむしろ滑稽とさえ思われます。公式訪問の際、例会で幹事なり委員長なりが、ぎこちない声で「××クン」といっているのを聞くと、私の顔はつい綻びました。恐らく、ふだんは「××君」と書いてあっても「××さん」と呼んだであろうに、ガバナーの前だからというので苦労して「××君」といっているようにきこえました。あるクラブでは窮した揚句でしょうか「××会員」と呼んでいました。日本では昔から長幼序ありの礼節がことばに表現されるのであって、対等若しくはむしろ下僚に向って使う「××君」を機械的に決めることはことばの本質を無視したものではないでしょうか。20年も前でありましょうか、幹事をつとめた私は「××さん」で通しましたが、その後私のクラブでも「××君」の型になっているようです。実際に声にするときは「××さん」とやっているようですが。こんにち、報導関係で、「××氏」では固すぎる場合「××さん」が一般に使われてい

るようです。だれに対しても共通に使われてしかも敬愛のニュアンスがこめられた「××さん」の型ならば、書きことばとしても話しことばとしても妥当と私は思いますが、いかがでしょうか。

最後のマンスリーレターだから、少しは格調の高いものをと思わないではなかったのですが、柄にないものは書けませんでした。今、私はガバナース・レターの一号を手にしてみて、図らずもうまいことを言っておいたと思うことです。こういうことを書いていました。「空にきらめく星を手に入れようと、長い棹を持って背のびをすることをやめて、今年度は、足もとのきれいな小石を拾うことにしてはどうでしょう。」

格調の高いことばがとかく現実から離れ易いことを恐れての提案でありました。このような提案をした私自身は、拾った小石さえ碌なものでありませんでした。慚愧の至りです。



最後にもう一言

第271地区ガバナー
八　木　　寛

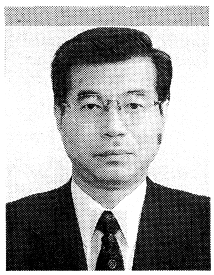
大過なく任務を終えまして、と月並みな御礼を申し上げたいところですが、とかくしているうちに任期が過ぎてしまいまして、とガバナーとしての怠慢を詫びねばなりません。ロータリアンの寛大さでご庇護下さったことに深くお礼を申上げます。

ところで、毎月の私の手記をふりかえってみますと、いずれも余りに主観的、いや独断的で、臆面もなく書きつゞけたものよとの反省が湧いてきて、お詫びを一言述べたくなりました。

私の年度は、ロータリー75周年の祝賀の年が明けた、次の100周年へのスタートラインでありました。ロータリーが次の躍進にそなえて姿勢を調整すべき年だと私は考えました。特に、躍進に躍進を重ねて世界第二のロータリー大国に急上昇した日本ロータリーにとっては、正に自己を見直す秋ではないかと思いました。そんなことから、10年も前のＲＩ会長コーンウェイのターゲット"Review and Renew"（見直せ出直せ）を想い起して、足下を見直すことを強調したかったのです。

毎号の月信で、一人のロータリアンとして自己を見直そうとしたことは事実で、評論家的な筆になり過ぎた観もそこに因があると思います。その意味では、ガバナーとしては成績はよくなかったと思います。ＲＩの役員としての任務は不十分であったことは反省しています。

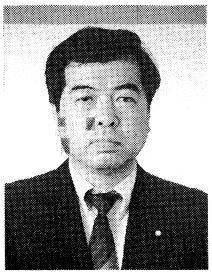
その意味で、地区の躍進に歯止めがかゝったことも事実だと思います。たゞしかし、各クラブ、さらには各ロータリアンに、「同ジテ和セズ」という孔子がいった小人の道から抜ける上で、私の主観的な発言が何が示唆になったとすれば望外のよろこびであります。ご愛読、ありがとうございました。



武　鹿　芳　造

昭和24年8月25日生
入会年月日
平成9年2月7日
事業所と役職
(株)住友銀行尾道支店
尾道支店　支店長
事業所所在地
尾道市土堂一丁目8-3

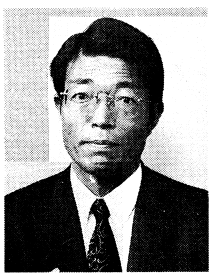
創業年月日	明治28年11月1日
住　　所	尾道市新浜一丁目3-5-803
結婚年月日	昭和49年10月27日
趣　　味	読書、オペラ観賞
家族構成	恵子　妻
	聡子　長女
	直樹　長男



浅　川　泰　生

昭和24年6月21日生
入会年月日
平成9年6月13日
事業所と役職
中国新聞社　支部長
事業所所在地
尾道市西御所町8-3

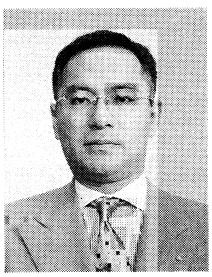
創業年月日	明治25年5月4日
住　　所	尾道市西御所町8-3
結婚年月日	昭和50年4月3日
趣　　味	山歩き、パソコン、読書
家族構成	美也子　妻
	暁　　長男
	春　菜　長女



岩　田　法　隆

昭和24年2月10日生
入会年月日
平成9年6月6日
事業所と役職
中国電力(株)
尾道営業所　所長
事業所所在地
尾道市栗原町5908-1

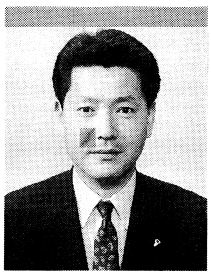
創業年月日	昭和26年5月1日
住　　所	尾道市栗原町5012-1-101
結婚年月日	昭和50年2月11日
趣　　味	テニス、スキー
家族構成	和代　妻
	法亮　長男
	康治　二男
	寛之　三男



村　上　博　志

昭和31年12月17日生
入会年月日
平成9年8月29日
事業所と役職
(有)桂馬商店　専務
事業所所在地
尾道市土堂一丁目9-3

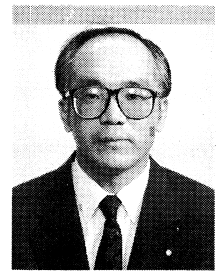
創業年月日	1913年4月1日
住　　所	尾道市土堂一丁目9-3
結婚年月日	1981年5月17日
趣　　味	スポーツ、読書、音楽鑑賞
家族構成	芳子　妻
	優　美　長女
	聡　美　二女
	ひかる　三女
	隆　　義父・英子　義母



中　島　秀　晴

昭和31年10月1日生
入会年月日
平成9年8月29日
事業所と役職
三和鉄構建設(株)　社長
事業所所在地
尾道市高須町5267

創業年月日　昭和24年11月14日
住　　所　御調郡向島町5578-32
結婚年月日　昭和61年1月19日
趣　　味　ゴルフ
家族構成　仁　美　妻
裕一郎　長男
健　介　二男
亮　太　三男



西　村　　洋

昭和29年12月13日生
入会年月日
平成9年8月29日
事業所と役職
西村自動車（株）社長
事業所所在地
尾道市栗原西二丁目7-12

創業年月日　昭和36年4月1日
住　　所　尾道市栗原西二丁目7-12
結婚年月日　昭和58年10月10日
趣　　味　ゴルフ、釣り
家族構成　直　子　妻
真　一　長男
佳　恵　長女
龍　太　二男
富士子　母

山　本　　修

昭和31年4月22日生
入会年月日
平成9年8月29日
事業所と役職
(株)山石　社長
事業所所在地
尾道市吉和町4904-1

創業年月日　昭和47年3月
住　　所　尾道市沖側町12-26
結婚年月日　昭和57年6月27日
趣　　味　ゴルフ、旅行
家族構成　玲子　妻
圭介　長男
幸介　二男

山　田　甯　彦

昭和19年10月14日生
入会年月日
平成9年11月21日
事業所と役職
(株)伊予銀行
尾道支店　支店長
事業所所在地
尾道市東御所町3-11

創業年月日　昭和16年9月1日
住　　所　尾道市新浜一丁目6-11-502
結婚年月日　昭和45年11月3日
趣　　味　ドライブ、ゴルフ、読書
家族構成　寿加子　妻
理　恵　長女（上村）
和　寛　長男

あ と が き

ふるい会員の方がときおり「昔の尾道クラブはのー」とか「八木ガバナーは…」などとおっしゃることがある。そんなとき、ふるい会員の顔には、懐かしさと同時に、なんとなく誇り高いものを感じます。そういえば、わが尾道クラブもまもなく50周年を迎えるんですね。

昨年の秋、小倉会長から「昔の尾道クラブのことを知らんメンバーが増えてきたんで、ベテラン会員に思い出ばなしなど書いてもらったらどうかのー」と話を持ちかけられた。これがきっかけで編集に着手した次第です。ところが悲しいことに会報委員長も副委員長も文学的センスはゼロときている。そこで入船先生に泣きつき相談やら何やらかにやらアドバイスいただき、こんな素晴らしい特集号が出来上りました。

この会報は「温故知新」と題し、現会員はもとより、これから入会されるメンバーにもぜひ一読してもらいたいと願っております。なお、準備を始めて間なしに、尾道東クラブからもぜひとの要望を頂きました。

特集号発行に当たり、お忙しい中を原稿を書いてくださった方々や、ふるい写真を探しだして提供してくださった皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成10年3月

尾道ロータリークラブ　会報委員会

委員長　木曽昭彦
副委員長　田邊耕造
本岡　修
中川俊治
信岡　巽
清水秀樹